

秋季大会発表要旨

特集

サービス業と文学

——錯綜するホスピタリティと〈客〉の境界

【特集の趣旨】

運営委員会

情の交流がそこに読み取られてきたが、その読みのモード自体の権力性を、サービスという労働のひずみが社会問題化し、他者への不寛容が蔓延する現代、改めて検証すべきであろう。

サービス業は利用者の欲求充足を手助けする業種であり、そこで人と人とは金錢を媒介としたサービス提供者と利用者⇨客という関係を取り結ぶ。特にホスピタリティを商品として利用者に提供する接客業は感情労働と呼ばれ、個人々々としての関係ではなく、役割に基づいて偽装的に取り結ばれた関係が含む暴力性や、本来の感情との隔たりによる疲弊が問題視されている。従来の文学研究では、ジェンダー、社会がもたらす抑圧と共に、サービス提供者と利用者という偽装を取り払った感

サービスの欲求充足を手助けする業種であり、そこで人と人とは金錢を媒介としたサービス提供者と利用者⇨客という関係を取り結ぶ。特にホスピタリティを商品として利用者に提供する接客業は感情労働と呼ばれ、個人々々としての関係ではなく、役割に基づいて偽装的に取り結ばれた関係が含む暴力性や、本来の感情との隔たりによる疲弊が問題視されている。従来の文学研究では、ジェンダー、社会がもたらす抑圧と共に、サービス提供者と利用者という偽装を取り払った感

また、多くの場合、サービスには経営者による業務マニュアルが存在し、サービス提供

者も利用者もそれに従属することで各々の立場が保証されるが、反した場合、どちらも排除の対象となり得る。管理や監視はそれを妥当とする規範によってサービスの質や空間の秩序を保つ一方で、行き過ぎれば私的なものが脅かされ、異質を理由にした排除につながる。したがって、その妥当性は常に問わねばならない。サービス業はこのように、我々を取り巻く空間を徹視的に捉え直すだけでなく、「客である／になる」ことをめぐる境界や、自明視されている〈日常〉の枠組み自体を問うことにもつながるだろう。

様々な空間をサービス業という視点から考えることは、そこに軋む多様な文脈、たとえば資本やジェンダー、国籍にかかわる抑圧や監視、人間関係の偽装性を可視化することに通じる。そのような文脈を問題化してきた文学（研究）とサービス業とはどのように切り結ぶのか、文学におけるサービス業とそれが提供される空間の様相に着目することで、文学のなかのサービス空間あるいはサービス空間のなかの文学ともいふべき問題系を浮上させ、文学を通じて今日の我々の生活空間および人間関係を考える視点を獲得したい。

すべてが「サービス」化する
社会／すべてを「サービス」
化する文学

泉谷 瞬

古典的な区分に従えば、サービス業は「第三次産業」の一部分に属すると見なされるが、高度発展した経済社会においてそうした区分はほとんど意味を為さなくなっている。たとえば第二次産業に含まれる製造業にしても、メンテナンスや修理にまつわる「アフターサービス」の要素を考慮すると、サービス業務は他の産業分野と密接に関わる事実がすぐに了解できよう。むしろ現代では、あらゆる労働に様々な「サービス」が組み込まれることによって、顧客の要望や潜在的な期待に応じる付加価値がますます求められている。また、教育機関や保健衛生、福祉にまつわる施設・業務などは公共サービスと呼ばれるところから、「サービス」は、営利的な発想のみと決して関連付けられるわけでもない。このように、社会の中へサービスの概念が浸透し

ていく状況を「サービス経済化」とひとまず定義したい。

そもそも「サービス」とは基本的に無形であり、なおかつ生産と消費が同時に行われるという特殊な性質を持つため、第一次・第二次産業に区分し難い多くの業務が「サービス」に括られてしまう。あらゆる労働がサービス業である、という極端な理屈もあながち間違いないと言えないのはこうした理由がある。

だが、そうであるならば、多義的かつ曖昧な「サービス」の姿を、文学という媒体は具體的な形で汲み上げることを許容するのではないだろうか。一般的な理解において「サービス」と捉えられていない状況や活動についても、文学作品の読解によって異なる側面を照射する可能性を本発表では扱う。発表にあたっては、津村記久子の作品を分析対象とする。津村は現代社会の「仕事」に従事する人々を細やかに描くという点で注目されることが多い作家であり、その文脈で本特集の主旨に沿うことは当然予想される。しかし本発表ではそうした評価を相対化しつつ、津村作品の分析によって、「サービス経済化」が進行する社会に生きる我々の認識がいかなる変容を

見せるのかを論じていきたい。作品は、『ポースケ』（二〇一三年）、『デイス・イズ・ザ・デイ』（二〇一八年）をはじめとして、その他に複数の短編小説を予定している。

承認要求と感情労働

——コンビニウーマンと異世界男子の時代に

久米 依子

村田沙耶香の芥川賞受賞作『コンビニ人間』（二〇一六）は百万部を売り、世界三十カ国で翻訳され、売れ行き好調だという。「コンビニ人間」というキャッチーなフレーズは、作中の主人公のようにそこに働く者だけでなく、日々コンビニを訪れる客も指すことができると感じられる言葉であり、現代人が、機能的なサービスを提供する／される関係に否応なく取り込まれていることを改めて意識させる。そこに反応して手に取る読者もいることだろう。

ただし『コンビニ人間』の英訳本の題名は

『Convenience Store Woman』であり、性(ジェンダー)の刻印がなされている。主人公古倉が(女性)である以上、「Woman」と訳されるのは当然かもしれないが、「私はコンビニ人間なんです」という古倉の宣言は、「コンビニ女なんです」という台詞とはニュアンスが異なるだろう。「コンビニ店員はみんな男でも女でもなく店員です!」という古倉の説明を裏切るような訳語は、しかし一方で、サービスマンに携わる者が(女性ジェンダー)を負うことの問題性も浮上させる。実際、作中の主なコンビニ店員は女性と外国人のトゥアン君であり、店長はどうやらいつも男性である。

それでは、管理職でない(男性)の「サービスマン」はどのように表現され得るのか。この答えを、意外に思われるかもしれないが、近年大いに流行しているライトノベルの異世界ファンタジーに求めてみたい。周知のようにライトノベルは、青少年層を中心読者とするエンターテインメントジャンルであり、読者の欲望に忠実な物語群とみなされている。しかしその異世界ファンタジーの冒険は、しばしば「サービスマン」の様相を呈する。現実

逃避の場と解せる異世界が、なぜサービスマンとなり、そこにどのような(感情労働)の特性がみられるのか。おそらく異世界は、アーレントが評した、「労働以上に崇高で有意味な他の活動力(アクティヴィティ)」についてはもはやなにも知らないという「この社会」(人間の条件)とは、異なる摂理で動いているのだろう。こうした問題を、承認要求の高まりが認められる現代において、物語上で感情労働を受け入れることの可能性、という視点で分析できないかと考えている。

バルクの末裔たちに

合 田 正 人

漢字も平仮名も読めず、かろうじて片仮名の読めた祖母はしばしば、歌謡曲の歌詞を片仮名に転記してくれと幼い私に頼んだ。書き手の端くれとなってから、私はよくこのことを思い出すようになった。初仕事だった、とさえ思っている。

serviceという「僕」(しもべ)を語源とす

る語彙は「サーヴィス」と訳され、そこに様々な意味が付与されている。私自身はすぐさま「兵役」と「聖務」、そして「配達」というその含意を思い起こすのだが、「聖務」の中でも私が特に関心を寄せるのは、神の言葉を書き写して民に伝える「書記」「代書」である。『エレミア記』36章では、神はエレミアに自分の言葉すべてを書き写すことを命じ、エレミアはバルクにそれを書き写させた。トート神の神話は、それが「文字」の発生と本質的に結びついた事態であることを告げている。いつからか「作家」「作者」と呼ばれ、「クリエイター」「創造者」とみなされるようになって存在は今もなお、このような「代書屋」であるというのが私の主張である。では、何を代書しているのか。「神の言葉」と呼ばれたものを今どう解釈するのか……。

この難題へと私を差し向けてくれたのは、偶々繕くことになった小川糸『ツバキ文具店』であった。それを読み進めながら、メルヴィルの『書記パートルビー』を想起したのはむしろ当然のことであったかもしれない。末尾を初めとして、未だ分からない点だらけの作品である。そもそもメルヴィルはなぜ「モ

ビー・ディック』の二年後にこの作品を書いたのか。パートルビーはどこから来たのか。おそらくこの作品は『タイビー』『モビー・ディック』との連鎖の中で読まれなければならない。証書も通貨もないタイビー族の世界。大抵は宛先に届くことのない手紙を積み込んで出港する捕鯨船。鯨の皮膚に刻印されたかに思える判読不能な文字たち。文具店と事務所の大海原を航海しながら、「代書」と「配達」という視点から先の問いに答えるべく努めた

入会手続き・会費納入等についてのご案内

- 入・退会の手続き、住所・所属などの変更、その他会員に関するお問い合わせやご連絡は、左記の特定非営利活動法人お茶の水学術事業会「日本近代文学会」係宛にお願いいたします。
- 入会の場合は、お茶の水学術事業会へ連絡すると申込書が送られてきます。入会届に記載する推薦人の姓名は必ず、自署でお願いいたします。なお、入会申込書は、日本近代文学会のホームページからもダウンロードすることができます。
- 退会の場合は、その旨を葉書でお届けください。

特定非営利活動法人・お茶の水学術事業会

「日本近代文学会」係

〒112-8610 東京都文京区大塚二―1―1

お茶の水女子大学 理学部三号館二〇四号室

電話・ファックス 〇三(五九七六)一四七八

メールアドレス anjis.info@npo-ochanomizu.org

○会費、機関誌購入代金などは、左記の郵便振替口座にお振込みください。

記号・番号 00140-1-260401

加入者名 日本近代文学会

秋季大会研究発表

個人発表

氣質と領分

——『當世書生氣質』の書生たち

飛田英伸

祭爾の恋愛譚と守山友芳の兄妹再会譚は、一組の男女の出会いと再会から成る従来の恋愛小説の一般的なストーリーを分割したものと見て見る事ができる。つまり、小町田と守山という二人の書生の登場は、従来の小説の解体を生むものとなっているのであり、複数の書生たちの登場は、小説の解体、そして再編を担うものとして考えられる。

坪内逍遙の『二談當世書生氣質』(晩青堂、明治十八〜十九年(一八八五〜八六))におけるさまざまな「氣質」を有する書生たちの存在は、人情や情欲に基づいて類別化されたものと指摘されたことはあったものの、戯作の名残りのように捉えられることも多く、主筋となる物語に対してどのように関与しているのかについて十分な説明が与えられてこなかった。本発表では、書生たちの描写が付随的なものであったのではなく、新たな小説を形成するための基本をなすものであったことを論じる。

お芳(田の次)をめぐって展開する小町田

小説の解体と再編の動力となっているのは真偽の弁別であり、その弁別を行うための装置として、異なる「氣質」を有する書生たちが導入されている。嘘を重ねて放蕩の資金を得ていた継原青造と「龍陽主義」を理論上行おうとした桐山勉六はともに虚偽に傾いたために破綻する。また、事実から外れた想像に走りがちな倉瀬蓮作は小説家に近い存在であり、真理を探究する任那透一は事実として起こりうることの範囲を画定する存在である。このように、「氣質」に応じた領分を付与された書生たちによって形成される、真偽を弁別する空間において、妹との再会を空想

として退けていた守山は空想が事実となることを経験し、恋愛の実現をめぐって悩む小町田は事実と想像の間で反省する主体となる。

書生とは文を用いる人間であり、逍遙は身体を有する人間としての書生を描くことで、文を通して事実を明らかにするものとしての小説を作り出そうとしたのだと考えられる。

永井荷風『日和下駄』の記述を支えるもの

——小林清親・木下杢太郎への言及を視座として——

廣瀬航也

永井荷風が歩行により収集した都市の諸相を一章に渡って記述した『日和下駄』(稗山書店、一九一五年一月)は、「文明批評」や「江戸趣味」等の作家的鍵語により説明されることも多く、そのイメージは現在に至るまで根強いと言つてよい。しかし『日和下駄』は、例えば架け替えられた永代橋周辺の風景を肯定的に評価する記述を有し、従来の荷風

イメージに回収されない様相も呈している。そこで本発表では、「日和下駄」本文中に確認される「調和」及び「平民」の二語に着目し、「日和下駄」における都市の諸相の選択・記述を支える趣向・論理が如何なるものであるかを検討する。それにより、「日和下駄」において都市を語ることが如何なる営みとしてあるかを考察する。

その際重要に思われるのが、「日和下駄」本文中にも言及される木下李太郎のテクストである。とりわけ『日和下駄』内で小林清親が言及される際には、李太郎の清親論が参照されている。荷風・李太郎ともに、「平民」すなわちそこに生きる人々の生活や情緒を描いているとして清親を評価するものの、「日和下駄」の評価する東京の風景は、李太郎が評価するような、江戸と西洋が混在する東京の風景と一線を画す。清親への言及を視座として『日和下駄』を同時代的な文脈へと開くことにより、都市の美的側面に関心が向けられた一九一〇年前後（南明日香『荷風と明治の都市景観』、三省堂、二〇〇九年一月）における『日和下駄』の位置を明らかにし、同時代の文学において都市を語ることの意義

を見出すことができよう。

以上のような試みは、従来の記号論・空間論的「都市論」では十分に捉えきれなかったような、個人ないし小集団による都市の経験と記述に焦点を当ててものである。それは、市区改正という大きな流れの中で、一九一〇年前後の文学が人々の生活の中に自身の居場所を求めたことを、都市を媒介として追究することにつながるだろう。

「転向文学」としての張文環 「父の要求」再考

——一九三五年前後における
「リアリズム」変容の観点から——

邱 政 茂

本発表は、張文環「父の要求」（一九三三・九）を、同時代日本における「転向文学」の文脈から再検討し、テクスト生成の力学を解明する。

植民地台湾出身の作家・張文環の「父の要求」は、「父の顔」というタイトルで一度『中

央公論』の新人原稿募集の選外佳作に選ばれたのち、改作を経て、一九三五年九月号の『台湾芸芸』に掲載された。一九三四年から三年にかけて、『中央公論』誌上には、村山知義「白夜」（一九三四・五）、島木健作「盲目」（一九三四・七）、立野信之「友情」（一九三四・八）、窪川鶴次郎「風雲」（一九三四・一〇）、中野重治「第一章」（一九三五・一）など、転向文学として括られた作品群が継続的に掲載されていた。同誌を指して書かれた「父の要求（父の顔）」は、これら転向文学と同じく政治犯の思想転換をめぐる主題を有している。数ある転向文学作品のうち、とくに中野重治「村の家」は、運動家の投獄、都会と農村をめぐるテーマ設定や、父との対立といった筋構成を共有していることから、「父の要求」ともつとも高い間テクスト性を有する作品の一つだと言われている（張文環「植民地プロレタリア青年の文芸再生」）。

しかし、転向文学の出現は、同時代における「リアリズム」の変容およびその論争とも深く関わっている。本発表は、これまで注目されてこなかったこの観点から、「父の要求」を捉えなおす。具体的には、「父の要求」と

同時代転向文学のテクストにおける「獄中思想転換」の描写が、どのように語られたのかを比較分析する。「村の家」を始めとする多くの転向文学作品は、主人公の内面から距離を取り得る三人称視点を採用している。それに対し「父の要求」は、「私」という物語外の語り手を採用している一方、テクストが進行するにつれて「私」が消失し、語りの水準が三人称に接近する。語りの変容に注目することで、植民地作家の日本語テクストにおける可能性と限界を探る。

織田作之助『夫婦善哉』

——ヤトナとしての蝶子を中心に——

浅 岡 瑠 衣

昭和十五年四月「海風」に発表された「夫婦善哉」は、織田作之助の出世作ともいえる作品である。これまで「夫婦善哉」は「しっかり者の妻が頼りない夫を支える典型的な大阪の夫婦」(尾崎名津子「織田作之助論」(大阪表象という戦略)和泉書院、二〇一六年六月)

の物語として読まれてきた。蝶子がしっかり者として評される理由は、働きによるものだと考える。蝶子の主な仕事はヤトナであるが、そのヤトナとして働く者について、尾崎名津子氏は複数のヤトナの定義を踏まえた上で「下層社会の住人である」(前掲論文)と述べている。

しかし、蝶子は当時には珍しく自分の意志で芸者になっている。芸者のお披露目いわゆる見世出しの際には、置屋がお披露目代を肩代わりするところを蝶子の父親が見世出しにかかる代金を負担していた。また、柳吉と内縁関係にあっても養ってもらうのではなく、ヤトナとして働き、家計を支えている。ここに職業意識の高さがうかがえる。

本発表では、職業をもつ女性としての蝶子に注目して作品を読み直したい。具体的には芸妓の下級として扱われてきた「ヤトナ」という仕事に注目する。テクスト上で「ヤトナ」は、「臨時雇で宴会や婚礼に出張する有芸仲居」としか説明がされていないが、大阪発祥の職業であり、政府公認の仕事である。

なでし子『やとな物語』(明治出版協会大正四年)や関露香「裏門から」(大阪屋号

書店 大正七年)など、当時の資料や研究文献をもとに、働き方や賃金などを調査し、ヤトナの社会的な位置づけを見直す。その上で作品に戻ることによって、蝶子を選び取った仕事、ひいては生き方を読み直せば、自らに合った仕事や働き方を選び生き抜く女性として蝶子を捉えることができるのではないだろうか。そこから蝶子と柳吉の関係を見直し、蝶子を中心とした作品の再評価に繋がられると考えている。

筒井康隆「夢の木坂分岐点」論

——内面世界と向き合う決意の物語として——

松 山 哲 士

筒井康隆「夢の木坂分岐点」は、一九八五年一月から一九八六年一〇月に「新潮」で連載された長編小説で、第二三回谷崎潤一郎賞受賞作である。本作の特徴は、主人公「彼」が別の人物になる夢を見、その人物がやくざや若侍になる夢を見るという、二重の夢が描

かれる点にある。やくざと若侍は「彼」の意識の深層を表し、「彼」はやくざと若侍の役割を考え、結末ではやくざと対峙する。つまり、夢が注目すべきモチーフとなっているのである。

先行研究では、作中で夢と虚構と現実が並置されることに着眼し、主に虚構の意義について考察（篠田一士、一九八八年他）したが、発表者は虚構に加え、作中で目立って描出される夢にも注視する。なぜなら、夢は作中に語句が登場する（内宇宙）を表象すると思量するからだ。（内宇宙）とは、J・G・バラードが一九六二年に提唱したSFの新理論で、「外なる現実と内なる精神が出会い、触れあう場所」、人間精神の内部に広がる空間を指す。筒井はこの理論に影響され、「虚構と現実」（一九七九年）他のエッセイで（内宇宙）を描く方法とその重要性を述べ、「虚人たち」（一九七九年）他のSF小説でも扱ってきた。本作では初めて夢の世界から（内宇宙）を描いた。

本発表では、現実や虚構が混在する夢の世界を（内宇宙）との関連から読解し、夢と虚構と現実の役割を考え、結末の「彼」とやく

ざの対峙の意味を明らかにする。やくざは「彼」の意識の深層にある死を表し、やくざとの対峙は「彼」の死を示す。それでも、「彼」はやくざと向き合うことで、自己の深層心理にたどり着くのである。筒井が本作の結末と関連すると言う、J・A・ホール『ユング派の夢解釈』（一九八五年）は、夢における死に「自我イメージの変容」という建設的な意味を付している。これらをつまみ、結論として、「彼」の死は悲劇ではなく、内面世界と向き合う決意を表していると論じる。

安部公房「大きな砂ふるい」とストリンドベリ

佐々木 幸 喜

本発表では、『安部公房全集』第二巻（一九七七年九月、新潮社）所収「大きな砂ふるい」（一九五一年頃執筆か、生前未発表）を取り上げる。本発表では大きく分けて二点議論したい。

第一は、本作の書誌についての修正検討で

ある。本作は、全集編集部により「小説」（全集巻末「作品ノート」と分類されているが、翻訳であることを指摘したい。原作は、スウェーデンの劇作家・小説家ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ（Johan August Strindberg）作『Stora grusharpan』であり、本発表では、安部はドイツ語版に拠って訳出した可能性が高いことを指摘する。主張の根拠として、原作の邦訳は例えば「大きな石ふるい」（『翻訳文学総合事典』第三巻、二〇〇九年一月、大空社）であり、タイトルが酷似していること、話の展開も極めて近いことなどが挙げられる。また、本作が翻訳であったことは、安部が主導した芸術運動（世紀の会）の資料に、翻訳を手がけた形跡があったことから裏づけられる。（『世紀の会』の会報「世紀ニュース」第三号（一九五〇年二月二七日）には、小冊子『世紀群』の「No.10」）として「ストリンドベルク 童話集」が近刊予定として紹介されている。これは、原題『Sagan』、一九〇三年に発表された一三の短編からなる作品集である。そこに収められた二番目の短編こそ『Stora grusharpan』であった。そして、これを担当予定だったのが安部

であったことが、資料から確認できる。

第二の議論として、原作と本作の比較対照により、原作の語彙や時制表現などが本作にどのように反映されたか／反映されなかったかを考えたい。例えば、語彙・語法を文中にどのように配置しているか、位相語やオノマトペあるいは性別語をどのように用いているかを観察することで、「多様な文体や方法上の実験を試みた」(『日本語文章・文体・表現事典』二〇一一年六月、朝倉書店、鳥羽耕史執筆「安部公房」安部の文体特性を探るこ

とにつなげたい。

を俗悪だと決めつけ、また模倣を否定したことに對して安吾は強く反発した。じつは、安吾が模倣や俗悪について言いはじめるのはこのころからである。「日本文化私観」で、秀吉の「最も俗悪なる意志」による営為について否定できない落ちつきがあると言ひ、「講談先生」(昭和十八・三)で「僕は天性模倣癖旺盛で……」と自分の創作方法に模倣があると述べるが、戦後の「通俗と変貌と」(昭和二十二・二)では、「人間自体が俗悪なもの」だとまで言う。小説を書く方法のみでなく人間をとらえることへと主張していくのである。

坂口安吾「日本文化私観」について

——タウト批判以後——

浅子逸男

坂口安吾が昭和十七年に発表した「日本文化私観」はブルーノ・タウトによる同題の著作を批判したものとされている。タウトが『日本文化私観』(昭和十一・十)で、日光廟

昭和十五年発表の最初の歴史小説「イノチガケ」を書いた頃は、講談から学んだ技法を用いており、まさに安吾自身が言う「模倣」をしていた時代だったと言えるだろう。ところがこの方法が、「金錢無情」(昭和二十二・六)など戦後の小説になると自家薬籠中のものとなっている。否定すべきは通俗であつて、俗悪は称揚される。タウトが言う俗悪、いかに、模倣といったものが、安吾にとつては生きていく人間にとつて切り捨てることのできないものとしてたちあらわれてくる。タウ

トが否定した概念を逆転させることによつて、自分の思考の枠組みとして発展させたのである。「日本文化私観」で有名な「法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ」という発言も、「国宝焼亡結構論」(昭和二十五・十)で「文化というものは、過去にもとめるよりも、未来にもとめる建設の方が大切」だと述べたことをふまえ、さかのぼつて生活から乖離した建築物を称賛するタウトを批判した安吾の真意を考察したい。

『ねじまき烏クロニクル』論

——物語の永久生成——

肖 禾子

『ねじまき烏クロニクル』(第1部～第3部、一九九四・四～一九九七・九、新潮社)は、ほかの多くの村上作品と同様にメタフィクション性を有する。というのは、物語論にかかわる表現および物語の生成過程がそれらの作品のテキストにおいて呈示されているからである。また、それらの作品には、危機に向

かう人物たちが別の場所（異界）に移動し、「闇」の力を持つ存在に反抗しながら、真実を求める過程が描かれている。本発表では、『ねじまき鳥クロニクル』におけるその反抗と探求の過程、およびそれに伴う物語の生成過程について論述する。

『ねじまき鳥クロニクル』は、村上春樹の小説論理（潜在意識の探求・物語と再編成などの）集大成としての作品である。語ることに、および物語そのものについての探求を一貫して課題としてきた村上春樹の小説論理が、この作品には際立って体现されている。しかし、豊かな表現が呈示されているにもかかわらず、この作品のテクスト表現の分析を十分に

行った先行研究はほとんど見られない。また、この作品が「謎解き小説」や「現代の神話」や歴史・政治的なものとして受容されてきた、という先行研究の状況も見られる。

そこで、本発表では、テクストの表現と仕組みの分析に重点を置き、各人物の物語内容を詳しく論じる。それにより、それらの物語を物語の生成過程を呈示する物語と規定し、物語生成のメカニズムを解明する。その上で、この作品において描かれているのは、物語を

作る人間の群像であり、物語る動物の我々の日常的な行為——言語による自己・世界の認識と創出であり、見えないものを探求することの否定性から生まれた物語の永久生成の過程の表象である、ということを明らかにする。また、テクストから読み取られる、物語の生成に関する論理を結論として提示すると同時に、『ねじまき鳥クロニクル』を語ることに、物語自体への省察を志向せしめる作品として評価する。

パネル発表

外国人宣教師の日本語文学

——キリシタン文学の継承と発展

郭 南燕、釘宮 明美
谷口 幸代、増田 齋
(デイスカッサント) ヨコタ村上孝之
(司会) 堀 まどか

近年、キリシタン文学の研究に力を注いでいる小峯和明氏は、一六、一七世紀を跨がる

約百年間のキリシタン文化は、日本の言語、宗教思想、信仰儀礼、学問教育、芸術、医療、出版などに広範囲の影響を与え、日本人の死生観や世界観を根本から変革して、近代文化の起点を構成したものだともみなしている（『アジア遊学・キリシタン文化と日欧交流』）。

そのキリシタン文化の代表的な成果は語学書、文学書、宗教書の「キリシタン文学」といえよう（海老沢有道「キリシタン南蛮文学入門」）。外国人宣教師と日本人信者の協力で作られ、宣教師の日本語学習、日本人の欧語学習、日欧文化の交流を示すものであり、現存書物は五〇点以下である。

「キリシタン文学」は、歴史学、宗教学、言語学などの研究対象にはなっているが、日本の国文学界ではあまり研究対象として扱われていないようである。小峯氏はこの現象を、「国文学がそうした国際的な視野をもちえていなかった証左」として、キリシタン文学を「まさに読まれざる文学の代表としてよい」といい、「世界に拓かれた日本文学を標榜するにはもはやキリシタン文学を無視した研究は考えにくい」と鋭く指摘している（『キリシタン文学と反キリシタン文学再読』『文学』）

一三卷五号)。

一方、幕末から現在まで来日した数万人の外国人宣教師のうち、約三百人(カトリックを中心に)が日本語を用いて大量な書籍(単著、共著、編著)を執筆、刊行している。その数は三千点上っている。その内容は、教理、祈祷、典礼、聖書翻訳と解釈、殉教物語、辞書編纂、書簡、紀行文、演劇、詩歌、随筆、絵本などを含み、「キリシタン文学」のジャンルと似ている部分が多く、その近代的継承と発展と見てよいだろう。

その著述形態は、(1)宣教師の口述と日本人の筆記、(2)宣教師のローマ字文の日本人による漢字・仮名変換、(3)宣教師の単独執筆、という三種類に分類されている(郭南燕編著『キリシタンが拓いた日本語文学』)。三千点以上の作品があるにもかかわらず、日本近代文学の角度から問題視されたことはわずかである(山梨淳「バリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」『キリスト教文化研究所紀要』二五巻一号、郭南燕『ザビエルの夢を紡ぐ…近代宣教師たちの日本語文学』など)。それは、近代文学の研究者がそれらの書物を読む機会が少なく、また宣教師らしい

内容を「文学」として最初から認識していないからなのではないかと思われる。近代宣教師の日本語文学は、キリシタン文学以上に「読まれざる文学」といわざるをえない。

「宣教師の日本語文学」は、思想性、宗教性、文学性において極めて高い価値があり、日本の多くの近代文学者(たとえば、芥川龍之介、北原白秋、木下幸太郎、三木露風、吉川英治、上林暎、長田幹彦、大仏次郎、司馬遼太郎、真杉静枝、吉屋信子、遠藤周作、野上弥生子、三浦朱門、安岡章太郎、犬養道子、石牟礼道子、須賀敦子など)に様々な影響を与えている。しかし、近年の「越境文学」や「外国人の日本語文学」の研究では、ほとんど取り上げられたことがない。

「宣教師の日本語文学」は、日本の言語文化と西洋の言語文化との融合によって生まれたものであり、独自の日本語運用、深い日本観察、豊かな文学表現に満ちており、日本の代表的な知識人を魅了してきたことも事実である。この膨大な作品群を、日本近代文学の一分野として検討する価値が十分あると思う。

この作品群に関する研究は、「キリシタン

文学の継承：外国人宣教師の日本語文学」(国文学研究資料館主催「総合書物学」の一ユニット・代表は郭南燕、井上章一)をテーマに、二〇一五年から始まり、基礎研究の第一歩として、「外国人宣教師日本語著書目録」を作成し、ネット上、部分公開中である。

本パネルは、発表者四人とデイスカッサント一人、司会一人により構成される。まず釘宮明美は、イエズス会士で哲学者・神学者であるクラウス・リーゼンフーパー神父(一九三八年生)の著作・出版活動を中心に、宣教師の過程でその著書の成立に関わった日本人協力者の役割を紹介し、宣教師の日本語著書が日本の言語文化・宗教思想・学術研究にもたらした意義を考察する。次に谷口幸代は、イエズス会士で上智大学第二代学長のヘルマン・ホイヴェルス神父(一八九〇―一九七七)の日本語と日本語文学に焦点を当て、その著名な短詩「最上のわざ」の詩的表現とそれがもたらした現代大衆文化(映画や女優の随筆など)への波及効果を論じる。

それから増田斎は、メリノール宣教会のジェームス・ハヤット神父(一九二二―二〇〇九)の日本語によるラジオ・テレビ番組の

作成や、それに携わった遠藤周作の協力を紹介し、メディアと大衆宣教の関係について考察する。最後に郭南燕は、東アジアにおける

宣教師による現地語文学という枠組みの中に、「宣教師の日本語文学」を位置づけて、

一九五〇年代の日本の文壇を風靡した、バリエーション豊かなソール・カンドウ神父（一八九七—一九五五）の作品を觀賞し、日本の知識人と一般読者からの反響を紹介する。さらに「宣教師の漢語文学」「宣教師のハンダール文学」と比較し、「宣教師の日本語文学」の研究意義を説明する。

本パネルは、「外国人宣教師の日本語文学」という新しい研究分野を紹介し、日本近現代文学に与えた宣教師の寄与を浮き彫りにすることを目的とする。

パネル発表

鷗外と露伴の道教

——受容過程の謎を考える

目野 由希、王 晨野

田野尻哲郎、岩谷 泰之
(デイスカッサント) 梁 鎮輝

道教研究に必要な基礎文献は、一九二六年の上海・涵芬楼による白雲觀版の道藏まで、ほぼ刊行されていない。同書はごく僅かしか本邦に輸入されず、通読だけでも多大の時間を消費する膨大な巻数の叢書である。

同叢書刊行の十年以上前の一九一五（大正四）年、森鷗外は、道教の身体技法に焦点を当てた小説「魚玄機」を発表した。王晨野は、同作品の先行研究を踏まえたくうえで、鷗外の原典解釈が特殊な上、同作品での道教が、過度に性的（閨房術的）であることを指摘している（二〇一九年十二月鷗外研究会）。しかも同作での道教は、それまで日本に影響を与えていた陰陽思想や神仙思想抜きに、身体技

法、特に閨房術に近いものとして描写されている。

翌一九一六（大正五）年、鷗外は「寒山拾得」「寒山拾得縁起」を発表する。ここで道教は、儒学・仏教・キリスト教と等価のように説明された上、「階級、国民、人種、宗教の帰一」を目指す団体、帰一協会が言及される。

一九一〇年代から二〇年代の日本で、軍人や教員などが道教を理解する契機は、原典や研究書とは考えにくい。しかし同時代の民間精神医療では、「道教」「道家」という語は広く流通し、ホワイトカラーに浸透しているというのが、現在の宗教学や民間精神医療研究の理解である。たとえば当時、「人体ラヂウム療法」を提唱した松本道別は、インドの「瑜伽」の「プラーナ」、中国の「道家医学」の「気」、メスマルの「動物磁気」、太霊道の「靈子」が全て同一と主張した。これらの精神療法は「不可視の「精神」をコントロールするための座法や呼吸法、瞑想やお手当てに取れんずる」（田野尻哲郎「活元運動の歴史——野口整体の史的変容」『近現代日本の民間精神療法』(国書刊行会、二〇一九)）。

鷗外が所蔵していた婦一協会会報については、岩谷泰之が論考を発表している（『森鷗外「寒山拾得縁起」論』『仏教文学』（二〇一八年四月））。鷗外は、一九一〇年代に道教を適切に理解し、一般に紹介することはできていなかった。彼が婦一協会の趣旨に、賛同していたかどうか不明である。しかし当時の鷗外には、同時代の婦一協会や民間精神療法などの動向を踏まえ、道教についてのフィクションを創作するのは可能であった。

また一九一〇年代の道教が、民間精神療法における諸教混淆の一部として紹介される際は、神智学の文脈がしばしば援用された点を、田野尻は指摘する。

日本の道教研究の搖籃期である一九三三（昭和八）年、露伴は「道教に就いて」『哲学』（岩波講座）を発表した。さらに一九四一（昭和一六）年、露伴は道教の闇房術たることを否定（『仙書參同契』「思想」（岩波書店））する。ここには鷗外「魚玄機」を含む、それまでの日本の道教理解の誤りをただす、あるいは疑問に回答したのではないかと思しき箇所がある。

「仙書參同契」には、「參同契の窮極のどこ

ろは、甚だ瑜伽の道に似てゐる。（中略）テオソヒーは今日未だ完成した學問となつてはゐないが、宗教若くは宗教類型のもの成立の秘奥微密のところを探れば、其様相の差異はあるが、いづれも有限の人間の生命の中に於て無限の自然の生命を體得した大讚歎が其根基となり源泉となつてゐることを見出すことを語るであらう。そして其宗徒の中の卓越せる者は、同じ修煉修行によつて、同じ境地に達し、同じ靈驗を得、従つて其教の遠大を致すに至るものであることを語るであらう。テオソヒーの議論は今擱く。參同契は實に丹道の祖書である」ともある。一九一〇年代の日本の道教理解が、神智学（テオソフィー）を媒介した場合があつた点を想起すれば、露伴の道教論は、通俗的なそれまでの道教理解の氾濫への回答とも解釈できる箇所が多いのだ。露伴の道教論発表まで、日本のメディアには、道教に関する誤解はどれくらい氾濫していたのだろうか。

現在、昭和期の露伴は、本叢書を通読した上で道教論を発表したと考えられている。

露伴『道教思想』は、岩波書店から一九三六（昭和一一）年に刊行され、一九五七（昭

和三二）年に角川書店から再刊された。戦後しばらくまでは、露伴の道教研究は、広範囲の日本人に読まれていたのだ。その好評の理由を理解するには、当時の露伴の知名度や、岩波書店出版物の売れ行きだけではなく、道教を民間精神療法の文脈で記憶する人々の存在について、考えてみる必要があるのではないか。

本パネルでは、日本の道教理解の変容について、鷗外や露伴の作品を介して考えていきたい。目野由希はパネル趣旨説明と、幸田露伴の道教について発表を行う。王晨野は、「魚玄機」と原典の比較研究を行う。田野尻哲郎は、「寒山拾得」他作品と同時代の民間精神療法等の関係について話をする。岩谷泰之は、一九一〇年代の日本の「道教」について発表する。梁鎮輝は、各口頭発表のデイスカッションとして、全員の口頭発表にコメントをする。